

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第四十五回）

「酒を讚（ほ）むる歌」

～大宰帥大伴卿の歌～

「遠とほの朝廷みかど」と【万葉集】で詠まれた大宰府は奈良時代には地方としては最大級の役所で、九州と壱岐・対馬・種子島（九国三島）を統治し外交・貿易の窓口であり、かつ辺境防備の任を担って設置された。

・万葉集の編者といわれる大伴家持の父・大伴旅人が大宰帥だざいのそち（大宰府長官）として赴任した時期は、旅人63才の神龜四年（727）末から翌五年の春頃までの間ではなかったかと推定されている。

・大伴旅人は大宰府帥として九州・大宰府に赴任して間もなく長い間、連れ添った妻・大伴郎女おほとものいらつめを亡くした。

・旅人は愛妻に先立たれた悲しさ、孤独の寂しさや老いの虚しさを日々酒で気をまぎらわすという生活が続いて、そこからこの一連（十首）の歌、「讚酒歌」が生まれたのだろうと言われている。また、この歌は大宰府の宴席で公表されたものであろうとの説がある。

・「大宰帥大伴卿、酒を讚むる歌十三首」は新潮日本古典集成「万葉集一」では次の五首が柱となり、その間の二首づつが一組をなすとあ

る。

しるし

ひとしき

1) 駿なき にび ものを思はずは 一杯
の 濁れる酒を 飲むべくあるら
し

(卷三—338)

(解説) くよくよしてもはじまらない物思いなどにふけるよりは、
いつそのこと濁り酒の一杯でも飲む方がよさそうだ。

・「駿なき物を思はずは」とは亡妻をしのんでいつまでもくよくよし
ていることをせず、濁り酒で気をまぎらわそうという気持ちであ
ろう。との説がある。 ・「濁り酒」とは糟かすを漉こしてない酒。

さか

2) 賢し えみと 物言ふよりは 酒飲
みて 酔えひ泣なきするし まさりた
るらし

(卷三—341)

(解説) 分別ありげに小賢(こごさか)しい口をきくよりは、酒を飲
んで酔い泣きしている方がずっとましだろう。

みにく

さか

3) あな醜 賢し えらをすと 酒飲ま
ぬ 人をよく見ば 猿にかも似む

(卷三—344)

(解説)

・ああみつともない。分別くさいことばかりして酒を飲まない人の顔をよく見たら、小賢しい猿に似ているではなからうか。

・「賢しら」は分別くさいこと。

よのなか

4) 世間の 遊びの道に 楽しきは

たの

え な

酔ひ泣きするに あるべかるら

し

(卷三—347)

(解説)

・この世の中の色々な遊びの中で一番楽しいことは、一も二もなく酔い泣きすることのようだ。

もだき

さか

5) 黙居りて 賢しらするは 酒飲

え な

みて 酔ひ泣きするに なほし

かずけり

(卷三—350)

(解説)

・黙りこくって分別くさく振舞うのは、飲んで酔い泣きするのにやっぱり及びはしないのだ。

・「万葉集にみる酒の文化」の著者、一鳥英治氏は「生粋の貴族であった大伴旅人は60歳を越してから大宰帥として筑紫に赴任したが、赴任後まもなく愛妻を亡くした。旅人の酒を讃（ほ）むる歌には、望郷の思いと、妻をなくした悲しさ、そして名門大伴家の没落といったやりきれなさが隠されており、今日風でいうと、年老いて後、妻に先立たれ、しかも単身赴任の悲哀を酒によって癒さんとした歌であるともいえる。」と述べる。

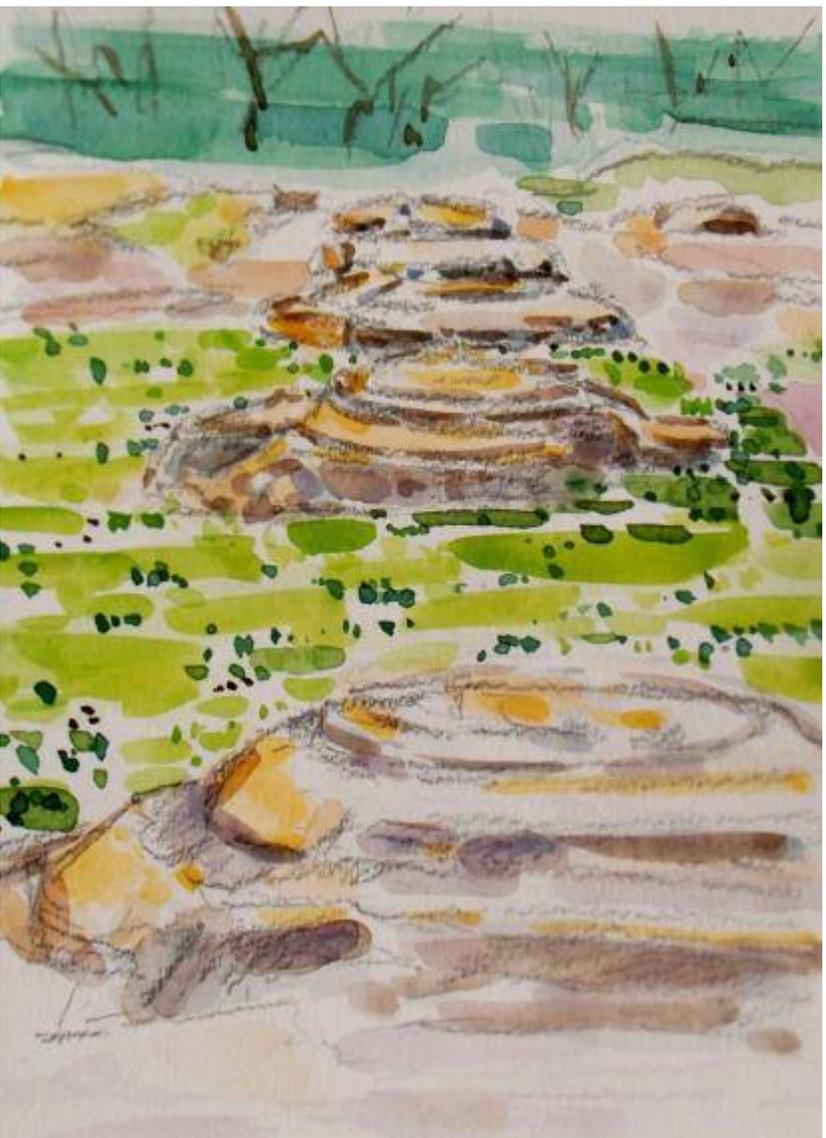
・大伴旅人が赴任した大宰府は博多湾からおよそ16キロほど南の内陸部に位置し、その規模は東西約2・6キロ、南北約2・4キロあり、発掘調査の結果、その北辺中央部には東西111m、南北211mの巨大な政庁（役所）の建物があつたことが確認される。今、この場所には、草むらのなかに往時の建物跡に礎石が並び、その礎石の前に立つと約1300年前に、この地で帥（長官）であつた旅人が愛妻を失って悲嘆に暮れ、お酒にたよりながら傷心の毎日を過ごしていただろうことが偲ばれる。

・なお、大伴旅人と妻・郎女が住んでいた官邸跡は政庁跡に隣接した二カ所の地に想定されている。

（参考文献）新潮日本古典集成「万葉集」・前田淑著「大宰府万葉の世界」・一鳥英治「万葉集に見る酒の文化」・島田良二著「大伴旅人と讃酒歌」等

(写生地)

大宰府政庁（都府楼）址の礎石群を描く。（池田杏花）



(所在地) 福岡市太宰府市坂本三―十五